日本語の親族呼称・人称詞に見る自己と他者の位置づけ

― 相互行為の「場」における文化的自己観の考察 ―

藤　井　洋　子

1．はじめに

人は人をどう呼ぶか。あまりに日常的なこと故、気に留めていないことも多い。が、実は生活の中で、どのように人を呼んでよいか迷うことは多くの人がしばしば体験していることである。「あの～、ちょっと…」とか「すみませんが、…」などと言って呼ぶことを避けることも多い。人の呼び方に迷うというのは、言うまでもなく、多くの選択肢の中から呼び方を選ばなければならないからである。日本語の呼称では、人称詞だけではなく親族名称で自分や相手を呼んだり、社会における職名や固有名詞などで呼ばなければならないこともある。それらの中からその場に相応しい呼び方を選択する行為は、その時、その場において相手をどのような位置づけで特定すべきなのかということに迷うということであろう。つまりは、自分とその人をどのように認識し関連づけるのか、その場には他に誰がいるのか、つまり、自分とその相手の関係ばかりでなく、周りにいる人たちとの関わりでどのように相手を位置づけるべきなのか、相手の社会での地位や立場は何なのかなど、日本社会で人を呼ぶという行為では、その場から非常に多くの情報を瞬時に察知し、呼び方を選択しなければならない。それと同時に、お互いがどのようにその場を創り出そうとしているかを表すことにもなり、自己と他者を規定する方法でもあるわけだ。しかし、私たちがそれをあまりに瞬時にやってのけるために、あるいは慣習として身につけているためか、どれだけ多くの情報の中から、何をもとに相手や自分の呼び方を選択しているのかということに、実はあまり注意を払ってこなかった。それは、自分のことは殆ど常に ‘I’ であるし、相手のことは ‘you’ であるような英語を始めとする西洋語と比較することで始めて浮き彫りにされることであろう。英語では日本語がするように多くの情報を瞬時に判断して相手の呼び方を選択するという行為は、少なくとももっとずっと少ないエネルギーでなされると思われる。人をどのように呼ぶかという問題は、このようにそれぞれの言語・文化によっても非常に異なった様相を示すものであり、その言語・文化の中の話し手と聞き手がお互いに創り出す相互行為と密接に関わっているといえる。

日本語における呼称については、これまで数えきれない研究がなされてきているが、その中でも、状況に応じて呼称がどのように選択されるのか、相互行為の中の自己と他者という観点から述べられているものは、そう多くはない（鈴木 1973、Enfield 2007、大西 1992、三輪 2001など）。

そこで、本稿では、日本語の１）親族呼称における視点の移動、２）一人称詞、二人称詞[1]の指示対象の推移という２つの特徴を示し、それらが日本語による相互行為の「場」における自己と他者の位置づけの方法と深く関わっているということを文化的考察を交えて述べていきたい。

２．日本語における呼称の特徴

２．１　親族呼称における一般的用法

まずは日本語の親族呼称について、鈴木（1973）をもとに概観する。日本語で人を呼ぶ場合に使用されることばはいくつかのグループに分けられる。人称代名詞、親族名称、職名を表すことば、固有名詞などである。その中で、一人称詞を取り上げるだけでも、「わたし」「わたくし」「ぼく」「おれ」「うち」「あたし」などが挙げられる。また、歴史を遡れば、「な」「われ」「てまえ」などさらに多くの種類が挙げられる。二人称詞についても同様で、「あなた」「あんた」「きみ」「おまえ」「おたく」などに加え、書きことばでは「御身」「貴殿」などがあり、歴史を振り返れば、「こなた」「おぬし」など、さらに多くの種類が挙げられる。以下は、鈴木（1973：148）から、40歳の小学校教員の自称詞、対称詞を調査した結果を示したものである。

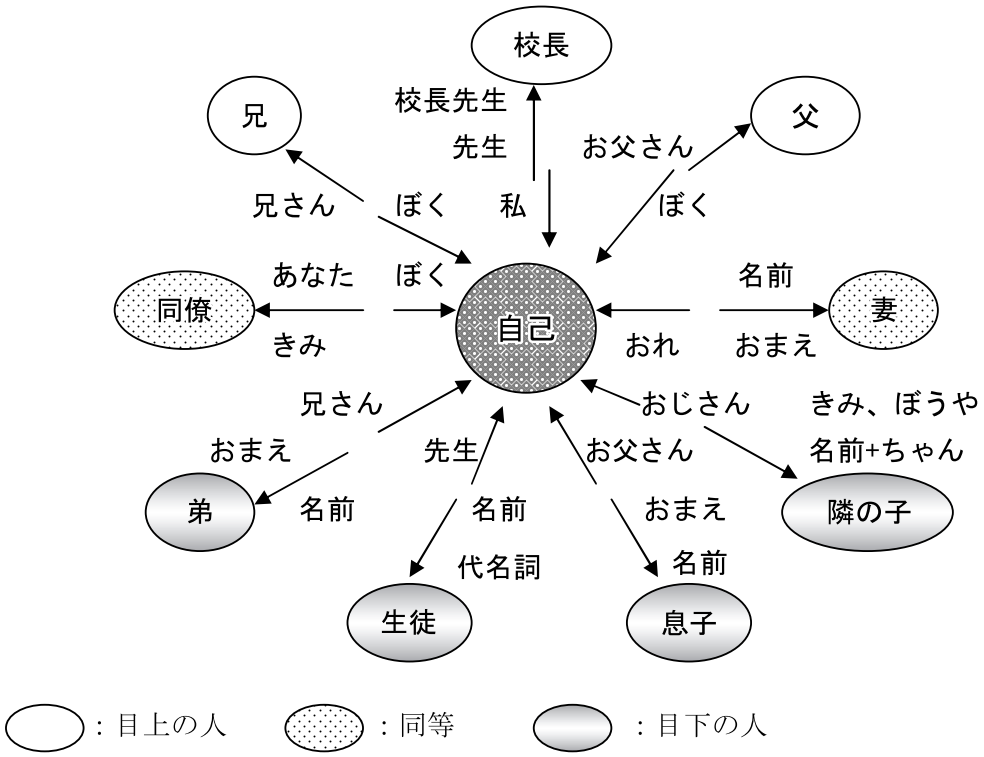


図１．小学校教員の自称詞、対称詞[2]の実例（鈴木1973：148）

この図から自称詞、対称詞が多岐にわたっていることがわかる。自称詞について観ると、目上の人に対しては、一人称詞が使われ、目下に対しては親族名称や職業名が使われていることがわ

かる。一人称詞も「わたくし」「ぼく」「おれ」と３種類を相手によって使い分けている。また、対称詞については、目上の人に対して親族名称や職名を用い、目下の人には人称詞や名前を用いていることがわかる。人称詞も「おまえ」や「きみ」「あなた」と３種類が用いられている。また、目下のものには名前を用いるということがすべての場合に当てはまると言える。ここの図では、親族以外も含まれているが、親族間のみの場合を取り上げても同じようなことがいえる。

ここでは、日本語の自称詞、対称詞における人称詞、親族名称の使われ方における特徴が明らかになっている。つまり、自称詞においても対称詞においても目上か目下かということが重要であり、親族名称や職名は、基本的に目下の視点をとって用いられるということがわかる。自称詞では、自分が目上の場合には、目下である相手の視点をとり、自分のことを「お父さん」「おじさん」「兄さん」「先生」と親族名称や職名で呼ぶことができるが、自分が目下の場合に自分を親族名称や職名で呼ぶことは、目上である相手の視点からの呼び方となるために用いることはできない。一方、対称詞でも、自分が目上の場合には、相手を親族名称や「部下」などと呼ぶことは目上である自分の視点をとることになるのでできないが、目下の場合には、目下である自分の視点から相手のことを親族名称や職名で呼ぶことができる。

２．２　親族呼称における虚構的用法

人称詞、親族名称の用法として次に特徴的なことは、鈴木（1973：158）の指摘している「虚構的用法」である。虚構的用法（fictive use）とは、実際には血縁関係のない他人に対し、親族名称を使って呼びかけることを意味する（鈴木1973：158）。鈴木（1973：158）は、日本語の人称詞の使用が極度に制限されているために、他人を親族名称で呼ぶ習慣は特に発達していると述べている。町の八百屋さんは歩いている中年の女性を捕まえて、「ちょっとそこのおかあさん、今日の大根安いよ。」と言って客を誘う。呼ばれた方も、赤の他人から、「おかあさん」「おねえさん」と呼ばれたこと自体を不思議には思わない。それ以上に、他人を「おばさん」「おじさん」と呼ぶことが定着し、そこには別の意味合いさえ持つようになり、言外の意味が生まれてくる[3)]。また、迷子になって泣いている子供を見つけたとき、「どうしたの、おねえちゃんに話してごらん。おかあさんはどこに行ったの。」と話しかけることはよくあることだ。迷子の子供にとっては、赤の他人である自分のことを「おねえちゃん」と呼んでも、また、赤の他人の子供の母親を「おかあさん」と言っても誰もおかしいとは思わない。

ここで注目したいのは、他人に対して用いられる親族名称が、前節でみた一般的用法と基本的には同じ原則に則っていることである。つまり、目上を呼ぶ親族名称が使われているということだ。ここでは特に実際の年齢とは無関係に、「おばさん」「おじさん」と呼び、目下の視点を想定して相手を呼んでいることがわかる。また、先の迷子の例でも、目下である迷子の子供の視点に立ち、自分を「おねえちゃん」、迷子の母親を「おかあさん」と呼んでいる。

一方で、迷子の女の子に「泣かないで。おねえちゃんの名前なあに。」という場合（鈴木1973：160）を考えてみよう。この場合の「おねえちゃん」はこれまで見てきた親族名称の用い方とは異なっている。つまり、年下の者には親族名称では呼びかけないということと反しているのだ。しかし、実は、家族内では、このような呼び方で目下の者を呼ぶことが頻繁に行われている。例えば、食卓を囲んでの夕食時、母親が息子に向かって「お兄ちゃん、今日は学校どうだっ

た。」と尋ねる。この場合には、例えここでその下の子供がその場にいなくとも、上の息子に向かって「お兄ちゃん」と呼ぶことができる。これは、自分の子供でも一番下の子の視点に立って上の子を「おにいちゃん」と呼んでいることになる。また、子どもを「おにいちゃん」「おねえちゃん」と呼んでいる母親が、自分の母親を「おかあさん」とは言わずに「おばあちゃん」と呼ぶ。これは、自分の子供の視点にたって、自分の母親を「おばあちゃん」と呼んでいることになる。また、鈴木（1973：167）は非常に興味深い例として、以下のような例をあげている。ある時、電車が駅につき大勢の乗客の入れ替わりがあった。多くの人の動きの中、ある老婦人が自分の隣りの席を叩きながら、「ママここにいらっしゃい」と叫んだそうだ。すると乗客の中から赤ん坊を抱いた若い娘が現れて老婦人の隣りに座ったという。つまり、ここでは、赤ん坊の母親をその母親が「ママ」と呼んでいたということだ。要するに、この老婦人は孫である赤ん坊の視点に立って自分の娘を「ママ」と呼んだと言うことになる。これらは日本人の感覚からするとさほど驚くことではないが、西洋人からすれば何が何だかわからないという現象であろう。つまり、日本語で誰を中心に、誰の視点で親族名称が用いられているのかということは、西洋から見ればかなり複雑なことであり、さっぱりわからないということになってしまうようだ。

これらの例で見られるような視点の移動現象を鈴木（1973：168）は、**共感的同一化**（empathetic identification）と呼んでいる。つまり、夫のことを「パパ」と呼び、自分の親のことを「おばあちゃん」と呼ぶのは、心理的に子供の立場に同調するからであり、子供の立場に自分の立場を同一化しているというわけだ。前述の老婦人の例も、心理的に孫に同調し、孫との共感的同一化を行っているといえる。そして、話し手は最年少者と共感的同一化を図ると鈴木は指摘している。それはまた、その場にいない最年少者にも、本当の親族関係でない相手を呼ぶときにも同様に最年少者を想定して同一化を図るのである。

これまで観てきた日本語の自称・対称における親族名称の用い方の究極的な規則を挙げるならば、誰かの視点と自己同一化を図り、その視点で人を呼ぶことができるといえる。それは、確固たる自分を中心に、いつも自称詞・対称詞が決まってくる西洋語とは本質的に異なっている。自己同一化を図る相手は、目下の者、あるいは最年少者である。それが、時には自分であったり、時には相手であったり、更には、その場に存在しない、想定された人であったりするということだ[4)]。

３．一人称詞、二人称詞の指示対象の推移

次に、日本語において他者の視点と自己同一化を図ることができる、あるいは、自己と他者が融合しやすいという特徴が、一人称詞、二人称詞の指示対象の推移にも見られることを指摘する。

３．１　フンボルトの逸話

フンボルト研究で知られる亀山健吉氏（1976）は、ウィルヘルム・フンボルトが1820年代の終わりから1830年にかけて、日本語の研究に非常に熱中したことを記している。しかし、フンボルトはある時期になり、きっぱりと日本語の研究を止めてしまった。フンボルトが日本語研究を断念した理由は、「こなた」の多義性にあったと指摘している。つまり、ある本によれば「こなた」

は、一人称を示すが、又別の本には二人称を示すとあり、また、別の本には人称の別なく用いると記されていた。彼にとっては、一人称と二人称の代名詞は、主と客の関係にあり、一番厳しく対立しているはずのものであり、これが簡単に入れ変わることはあり得ないことだったのだ(1976：16)。実は、このようなことは日本語のこれまでの歴史の中で、また現代日本語にも観てとれることであり、日本人にとってはこれも不思議なことではないであろう。次に、この一人称詞、二人称詞の指示対象の推移について概観していく。

３．２　一人称詞、二人称詞の指示対象の推移

ここでは、日本語の一人称詞、二人称詞が長い歴史の中で、自称、対称両方に使われている代表的な例「こなた」「われ」「なんじ」「てまえ」「おれ」を概観していく。まずは、「こなた」だが、人称詞としての「こなた」の自称・対称の用法は、平安時代に現れている（『日本語語源大辞典』2005）[5]。以下は、その後の室町時代の作品の中で現れている「こなた」を示す。

（１）「そなたは思い寄らずとも、こなたは思い寄りて候」（『伽・弁慶物語』室町時代）
（２）「こなたの（語る）平家は人がほめまらする程に、私もうれしうござる」（狂言）[6]

（１）では、二人称詞の「そなた」に対し、「こなた」は一人称詞となっている。また、（２）での「こなたの（語る）平家は」は、「あなたの語る平家は」の意味であり、二人称詞として用いられている[7]。もともと指示代名詞の「こなた」は、話し手に比較的近い人やものを指すというものだったが、その後、一人称を指すようになり、のちに二人称を表すようになった。上記に観られるような室町時代の二人称詞としての「こなた」は、「そち」「そなた」より敬意が濃かったが、時代が下がるにつれ、敬意が薄れ[8]、「あなた」がこれに代わったという（『岩波 古語辞典』1982）[9]。しかし、いずれにしても、同時代に「こなた」は一人称詞としても二人称詞としても用いられていたことで、フンボルトを悩ませてしまったことは事実のようだ。

「われ」は、古代は「わ（吾）」であり、自称の代名詞として用いられた。「われ」は、この「わ」に接尾語の「れ」が付いたものである（『日本語源大辞典』『語源大辞典』）。一人称詞の「われ」は上代からみられ、中世以降に二人称詞として「おまえ」の意味で目下や身分の低い者に用い、後には相手を卑しめても用いた（『日常語の意味変化辞典』）。

（３）「そなたとわれほど、にあふたつれはおりない」（狂言）
（４）「この僧に問ふ。われは京の人か、いづくへおわするぞ」（『宇治拾遺物語』[10]）

（３）の「われ」は一人称詞として、（４）は、二人称詞として「おまえ」の意味で用いられている。

（５）イソボがいうには「われは人間でござる」シャント怪しういわるるは、「われにそれをば問わぬ…」（『天草伊曽保物語』1593）（Shibasaki 2005）

ここでは、一つの物語の一文の中に、一人称詞としての「われ」（前出）と二人称詞としての「われ」（後出）が同時に出現しているのがわかる。

「な」「なれ」「なんじ」などもまた、一人称詞、二人称詞として用いられた。もとは「汝」の中国音から来ているという説や、朝鮮語 na（己）と同源という説などがあるが（『日本語源大辞典』）、一人称詞として用いられ、その後、二人称詞として用いられるようになったと思われる。

（6）「ながが心から鈍（おそ）やこの君」（万葉集 巻第1741 高橋虫麻呂の歌）[11]

（7）「ほととぎす、ながが鳴く里のあまたあれば　なほうとまれぬ思ふものから」[12]

（詠み人知らず『古今和歌集』）

（6）の「ながが心」は「わが心」の意味であり、ここでは自称の「な」として用いられている。また、（7）は「おまえが鳴く里」の意味であり二人称詞となっている。「な」は、奈良時代には一般に二人称詞として使われ、現在のアナタに対すオマエのような意味合いで使われており、呼びかけの対象が動植物であることも多かったようだ。また、「なんじ」は、古くは相手を尊敬して呼んだ語と推定されるが、奈良時代以降、対等またはそれ以下の相手に対して用いられ、中世以降は目下の者に対する、もっとも一般的な代名詞として用いられた（『日本語語源大辞典』）。

「てまえ」は、一人称詞としては室町時代から用いられ、もともと「自分の手の前」の意から、「こちら」の意味になり、そこから転じて、「私」「自分」を謙遜して言うときに用いられた。一方、二人称詞としての使用は江戸時代からである。二人称詞となり、目下の相手を指すこともあった。

（8）「テマエニカネガナイホドニカセラレイ」（『日本ポルトガル語辞典』）

（9）「てまへの居城、随分堅固に相守り申さるべし」（『浅井三代記』）

（8）は、「自分に金がないので貸してくれ」ということであり、「テマエ」は一人称詞として用いられているが、（9）では、「おまえの居城」ということであり、二人称詞として用いられていることがわかる。

最後に、これまでとは逆に、本来二人称詞であったものが一人称詞として用いられるようになった例として、「おれ」を挙げる。二人称詞としての「おれ」は、主に上代から中古にかけて用いられた。また、奈良時代から平安時代には、下位者に対して、または相手を罵り軽蔑して言った（『日常語の意味変化辞典』）。一方、一人称詞としての「おれ」は、中世以降に使われるようになり、特に近世以降多用され、貴賤男女の別なく用いられたが、近世の後半期頃から女性の使用が絶えた。同等もしくは目下に対する使用例が多いが、目上に対する用例もあり、江戸期までは現代語のように特にくだけたことばとはいえなかったようである（『日本語源大辞典』）。

（10）「ほととぎす、おれなきてこそ我は田植うれ」（『枕草子』）

（11）「おれとわごりょは好い仲ながら」（『宗安小歌集』）

（10）の「おれ」は、二人称詞として用いられており、（11）の「おれ」は一人称詞として用い

られている。

次の表１は一人称詞が二人称詞へと変化したものと時代的な推移を示している。

表１．一人称詞・二人称詞の通時的推移[13)]

（Shibasaki 2005：173より。著者により翻訳、一部改訂）

例	指示原形	拡張指示	大体の時期
われ	一人称	二人称	上代 ～ 近世（19ｃ後半）
てまえ	一人称	二人称	近世（17ｃ）～ 現代
わ	一人称	二人称	上代
ぼく	一人称	二人称	近世（17ｃ）～ 現代
わがみ	一人称	二人称	中世（13ｃ）～ 近世（19ｃ後半）

これらに観られるように、日本語においては一人称詞が二人称詞として用いられるようになるという現象は、上代から現代に至るまで続いていることになる。以下には、方言も含めた現代日本語における例を示す（橋本 2005）。

（12）自分がやりました。
（13）自分、今、なに言うたん？（現代関西方言）

（14）われは海の子　白波のさわぐ磯辺の松原に（「われは海の子」より）
（15）われェ、なにしとるんじゃ。（現代関西方言）

（16）おのれのことをよく考えてみます。
（17）おのれェ、よくも言ったなあ。

それぞれ（12）（14）（16）は一人称詞として用いられており、（13）（15）（17）は二人称詞として用いられていることがわかる。

このように上代から現代まで、日本語では一人称詞が二人称詞にも用いられるようになった例が多く認められる。一方、前述のフンボルトの逸話で見られるように、西洋人にとって、絶対の自己を表す一人称詞が、二人称をも同様に指示するということはまずあり得ない。西洋語では、自己と他者は最も先鋭に対立しているものであり、それが入れ替わるということは想像を絶することなのであろう。西洋語は英語のみならず、フランス語、イタリア語、ギリシャ語、ラテン語など、古く遡ればegoを語源とし、それぞれに音韻変化を経て現在のような形になったが、どの言語に於いてもegoを語源とする一人称代名詞、つまり現代英語のＩに当たるものとyouに当たるものは、対峙する人称詞として決して交わることなく表されてきた。では、日本語の一人称詞、二人称詞の指示対象の変化、融合という現象はどのように解釈したらよいのであろうか。言うなれば、この現象はことばによる相互行為が行われている場において、一人称、二人称が融合する、つまりは、自分と相手、自己と他者の境があいまいになってしまっている、あるいはなくなって

しまっているともいえる現象だといえる。人を呼ぶという行為が、対話を中心とする相互行為の場で行われることを前提として、以下では自己と他者がお互いにどのような位置づけで相互行為の場を創造しているのかということを、日本語と英語を比較しながら見ていくことにする。

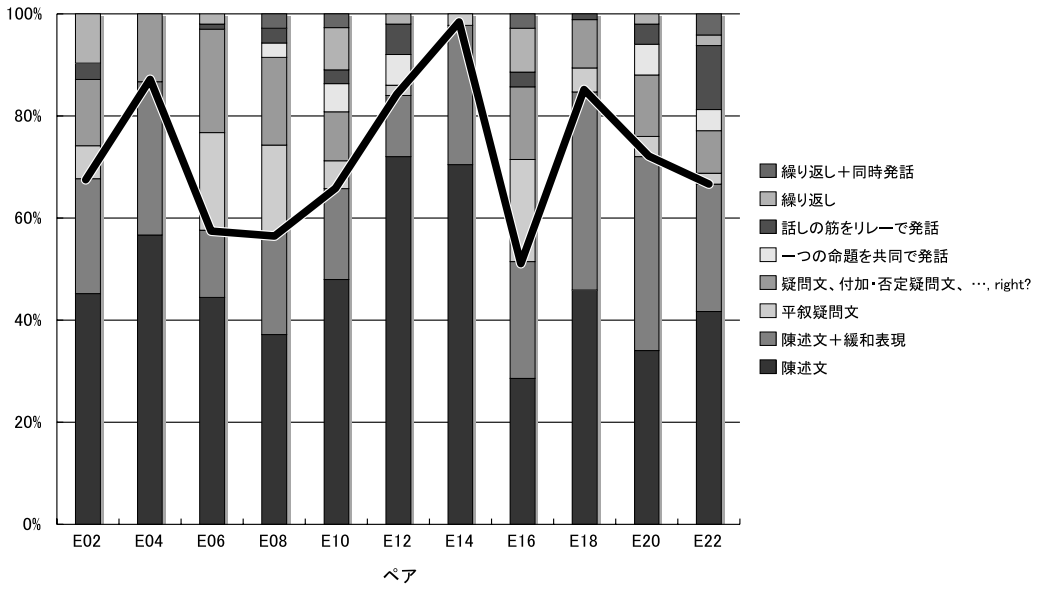
４．日本語と英語の相互行為の特徴

ここまでは、日本語での呼称における視点の同化という特徴を２つの観点から概観してきた。親族呼称では、相手への、あるいはそこに存在しない他者への自己同一化を見ることができ、親族呼称の用い方における自己と他者の融合的現象を指摘した。また、一人称詞と二人称詞については、本来の一人称詞が時を経るにつれ、二人称詞として用いられるようになり、最終的には同時代においても同じ人称詞が自称と対称に併用されるということを示し、先の親族呼称における自己同一化と同様、一人称詞と二人称詞の使用の推移における自己と他者の融合的現象を指摘した。人を呼ぶということが対話をするときの必須事項であることを勘案すると、この自己と他者の融合的現象は、対話という相互行為の中の自己と他者の位置づけということと非常に密接な関係があると考えられる。

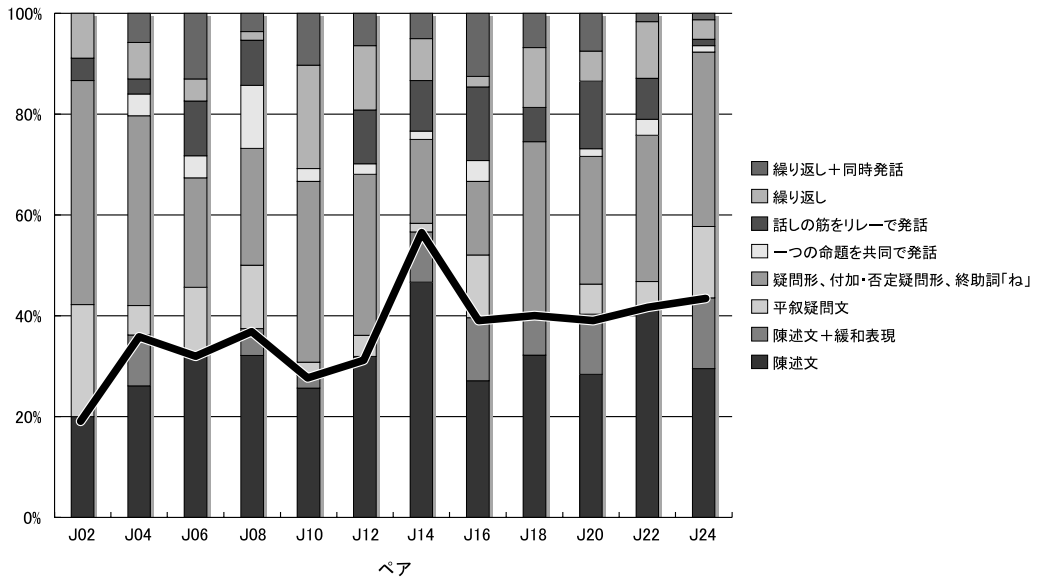
このようなことを踏まえ、次に、日本語と英語の相互行為における自己と他者の位置づけについて、著者がこれまで行ってきた研究をもとに考察を行っていく。ここでは、Mr Oコーパスというデータベース[14] を用い、日本人同士、アメリカ人同士で行った課題達成における相互行為を対象に、その言語的特徴を中心に分析した結果を示す。

この課題達成の共同作業は、女性同士二人がことばのない15枚の絵カードを並べ替えて物語を作るというものである。協力者はすべて女性であり、同数の大学生と先生からなる。全ての過程はビデオデータとして記録され、文字化されている。本研究では、アメリカ人11ペア、日本人12ペアの学生同士のデータを分析した。その結果、日本人は常に相手の反応を確認し、合意をとりながら、相互一致を計ろうとする形で作業を進めていくということがわかった。殆ど、一瞬一瞬と言っていいほどの頻度で相手からの賛同や合意を求める言語形式を用いて作業を進めることが非常に特徴的であった。一方、アメリカ人は、まずは自分のアイデアを提案し、それに対して相手からの反対意見がなければ、受け入れられたものとして、先に進むという形で作業を進めていくという特徴が見られた。つまり、提案者が相手の合意を求めることは必ずしも必要ではなく、何も反対意見がなければ、それは受け入れられたものとして先に進んでいく。従って、相互行為は自分の意見の表出ということに重きが置かれるようなやり方で行われていく。一人一人が話す長さを見ても、日本人は非常に短い単位で話者交替が起こり、その度に相手の反応を求めるが、アメリカ人は一人の話の内容が完結しなければ話者交替は起こらないというような形態で課題達成の作業が進んでいく。以下は、その言語的特徴を示したものである。

右頁グラフにおいて、黒い線から上は、相手からの反応を引き出すような言語形式が用いられている頻度を示しており、黒い線から下は、主に自分の意見を述べることを目的とする陳述文、あるいは緩和表現を伴った陳述文という言語形式が用いられている頻度を表す。グラフ１と２を比較して明らかなように、日本語には相手からの反応を引き出すような言語形式が圧倒的に多く用いられていることがわかる。このことは、日本人同志の作業が、常に相手の合意や反応を確認



グラフ１．アメリカ人の課題達成の相互行為における言語的特徴



グラフ２．日本人の課題達成の相互行為における言語的特徴

しながら次のステップに進むという形で進められていることを示している。これらの言語表現を通して二人の作業を精査していくと、二人がまるで共通の頭脳を持っているかのように作業を進めていくことがみてとれる。一方、アメリカ人の言語的特徴では、自分の考えを提案する場合にも相手の反応を引き出すような言語形式は用いられず、一人一人が独自に考えを提示していく陳述文が中心となって展開されていることがわかった。

このような分析を通じて明らかになったことは、日本語と英語のことばを中心とした相互行為

では、基本的に根底にある自己と他者のあり方、捉え方にかなりの違いがあるということである。日本人の場合には、自己と他者が融合するように自分たちを位置づけ、その結果として相互行為も自他不分離とも言えるように融合的に進められる。一方、アメリカ人の場合には自己と他者、自分と相手は、確固たる個対個の対峙であるために、相互行為も自己と他者が異なった存在としてそれぞれの考えを主張していくというやり方で進められる。日本人とアメリカ人の相互行為における自己と他者の位置づけを、イメージ図で示してみる。

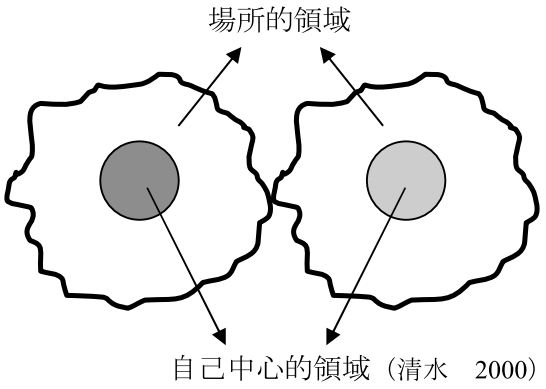


図２．アメリカ人の相互行為における自己と他者の位置づけ

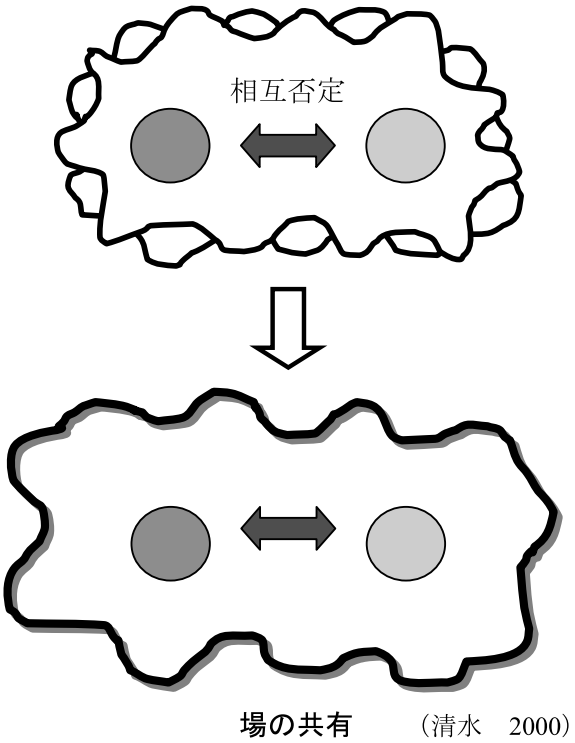


図３．日本人の相互行為における自己と他者の位置づけ

このイメージ図は、生命科学者の清水博氏が「場の理論」[15] を展開するために示したものである（清水 2000：150）。この卵モデルによれば、自己は卵の黄身に相当する局在的自己とその白身に相当する偏在的自己から構成されている。一つの場所に数人が集まった場合には、一つの器に数個の卵を割って入れた状態に相当し、白身はその流動性から境目がはっきりしなくなり、次第に融合する。黄身は自己中心的領域であり、その形状を維持しようとするが、融合した白身の中でそれぞれの情報を察知しようとする黄身の動きもまた白身を通じて他方の黄身へ伝えられることになる。つまり、黄身はそれぞれ自立的な自己表現を行う一方で、白身という共通の場との接触を通じて互いに影響を与え合う。共有化された白身はさまざまな黄身の表現に対する共通のコンテクストを表現し、黄身の表現によってそのコンテクストも変化をしていくことになる（清水 2000：149）。換言すれば、黄身の部分は、一人一人が持っている独立した自己を表す部分であり、白身の部分は自分と他者のおかれた場において相手と融合し、その場を共有化することが可能な流動的な部分である。独立した自己は、白身を通じてその動きをもう一方の自己へ伝えることができ、両者は場を共有することになる。日本人の相互行為における自己と他者の融合的位置づけは、このような卵モデルで示されるような場の共有のあり方を現実のものとしていると言える。一方、アメリカ人の相互行為は、日本人の場合に比べるとこの白身で示される共有部分の独立性が強く、相手の白身の部分との境界線がもう少し明確であるといえる。このように、日本人とアメリカ人の課題達成の場における、自己と他者の位置づけはこの卵の図で示すような違いがあると言える。

5.「場」における自己と他者

日本語と英語の一人称詞、二人称詞のあり方は、自己と他者をその「場」においてどのように位置づけ、自分をまたは相手を呼ぶかということと深く関わるだけに、相互行為の場における自己と他者の位置づけ方と密接な関わりを持つはずである。日本人の自己と他者の融合という特徴は、このような言語を中心とする相互行為やコミュニケーションの研究のみならず、文化人類学、文化心理学の分野においても多く指摘されている（鈴木 1973、メイナード 1997、北山 1994、Lebra 1994）。文化心理学者の北山（1994：153）は、「アメリカ文化では、自己とは相互に独立したものであるという前提があるのに対して、日本文化では関係志向的、相互協調的側面が強調されているようである」と述べている。この相互独立的自己観と相互協調的自己観は文化の中で創られる文化的モデルであり、「文化の様々な習慣、風習、社会的システムなどから派生する「ライフ・タスク」に反映されている」としている。相互独立的自己観は、「自分自身の中に誇るべき属性（e.g. 才能、性格、能力）を見いだし、それを外に表現し、そうすることによって、自己実現をはかり、それらの属性の存在を自分自身で確証することである」とし、「人間関係は重要であるが、それは自己の独立が確立されたうえで個人的に選択できるオプションにすぎない」と説明している（北山 1994：154）。一方、日本を含む東洋の文化は、自己は他と根源的に結び付いているという前提に立っており、相互協調的自己観においての「必要条件は、意味ある社会的関係に所属し、そのなかで相応の位置をしめ、他と相互依存的・協調的な関係を持続することにより、自己の社会的存在を確認し、かくして自己実現をはかることである。個人の独立も重要で

あるが、これは他との相互共存を満たしたうえで個人的に選択できるオプションにすぎない」(北山 1994：154）ということだ。このような自己観の文化的モデルは、会話を中心に展開される相互行為の中においても実現されるものであり、本稿で見てきた課題達成の相互行為の場面における日本人とアメリカ人の違いにも反映されているといえよう。

6．むすび

本稿では、日本語と英語の親族呼称や人称詞が示す特徴は、それぞれの言語文化が示す「場」における自己と他者の関わり方と無関係ではないことを示してきた。他者と自己同一化しようとする日本語の親族呼称や人称詞の用法は、相互行為の場の中で自己と他者の境界線が曖昧で互いに融合しやすい日本人の文化的自己観と深く関わっている。鈴木（1973：201）も「対象への自己同化が日本人にとって美徳ですらあることがわかる」と述べている。一方、一人称詞、二人称詞の指示対象が簡単に入れ替わるというようなことは考えられない英語の人称詞の用法は、相互行為の場の中で、個対個として自己と他者が対峙する西洋の文化的自己観と深く関わっているといえるだろう。

本稿では、相互行為の場における自己と他者の位置づけが言語のあり方と深く関わっていることを呼称および課題達成の共同作業の言語的特徴を通して明らかにした。日本人のこのような、「場」における自己と他者の位置づけは、その他の言語現象にも見いだせることはこれまでにも指摘されてきた。それらはまた、他文化の自己と他者の位置づけとその言語的特徴を比較することで、それぞれにその本質的性質が浮き彫りにされる。このようなアプローチを通じてのことばの本質的な理解は、文化・社会の理解につながるものでもあり、今後更なる研究の発展が望まれる。

参考文献

Enfield, Nick. 2007. Person reference in interaction – Linguistic, cultural and social perspectives. Cambridge: Cambridge University Press.

Fujii, Yoko. 2009. Differences of situating self in the place/*ba* of interaction for conducting a problem-solving task by Japanese and American participants. Presented at the 3rd Tokyo International Closed Workshop. ms.

____. forthcoming. Differences of situating Self in the place/*ba* of interaction between Japanese and Americans.

橋本　治．2005.『ちゃんと話すための敬語の本』ちくまプリマー新書.

堀井令以知編．1990.『語源大辞典』東京：東京堂出版.

堀井令以知編．2003.『日常語の意味変化辞典』東京：東京堂出版.

井出祥子．2006.『わきまえの語用論』大修館.

『岩波 古語辞典』. 1982. 東京：岩波書店.

『時代別国語大辞典　室町時代編一』. 1985. 東京：三省堂.

亀山健吉．1976.「日本語の民族性について」『女子大通信』No. 324. 日本女子大学. 4-20.

亀山健吉．1978.『フンボルト』中央公論社. 249-255.

北山忍．1994.「文化的自己観と心理的プロセス」『社会心理学研究』第10巻第３号. 153-167.

Lebra, Takie Sugiyama. 1994. *Migawari*: The cultural idiom of self-other exchange in Japan. In Ames,

Roger T. , W. Dissanayake, and Thomas P. Kasulis (eds.), Self as person in Asian theory and practice. Albany: State University of New York Press. 107-123.

Maynard, Senko K. 1997. Japanese communication. Honolulu: University of Hawai'i Press. 9-43.

松本宙．1981.「御伽草子の語彙」佐藤喜代治編．『中世の語彙』講座日本語の語彙第４巻．明治書院．193-212.

三輪　正．2001.「一人称二人称代名詞の比較文明的考察―特に対話との関わりにおいて」『比較文明17』．比較文明学会．

『日本語源大辞典』．2005．東京：小学館．

大西智之．1992.「日本語の自称詞と人称代名詞―鈴木説再考―」帝塚山大学教養学部紀要．帝塚山教養学部．26-46.

Shibasaki, Reijirou. 2005. Personal pronouns and argument structure in Japanese: Discourse frequency, diachrony and typology. Ph.D. dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.

清水　博．1996.『生命知としての場の論理―柳生新陰流に見る共創の理』中公新書．

_____．2000.「共創と場所」『場と共創』NTT出版．23-177.

鈴木孝夫．1973.『ことばと文化』岩波新書．

Trondheim, Lewis. 2003. MISTER O. ©Guy Delcourt Productions (France)/www.editions-delcourt.fr. Tokyo: Kodansha. p. 10 and p. 32.

注

１）鈴木（1973）は、自分自身を呼ぶことばの総称として「自称詞」を、話し相手を呼ぶことばの総称として「対称詞」という用語を用いているが、本稿では、親族呼称と人称詞を区別するために、自分を呼ぶ人称詞の総称として「一人称詞」、相手を呼ぶ人称詞の総称として「二人称詞」という用語を用いる。

２）ここでは、親族名称も人称詞も含まれているために、「自称詞」「対称詞」という用語のままで記す。

３）鈴木（1973：159）は、NHKの子供番組の中で、「うたのおねえさん」「体操のおにいさん」という呼び方が定着し、対称詞のみではなく、自称詞としても使われていることを指摘している。また、関西方言での「おばはん」や「おっちゃん」のように、本来の親族名称が、親族以外の人を呼ぶときに用いられるようになり、その上、独特の意味合いを持つようにもなる。このことは、ことばは繰り返し使われるうちに定着し、本来の意味のみならず、新しい意味合いが加わることを表しており、ことばの使用と「頻度の高さ」の重要性を示す良い例でもある。

４）一方、英語で親族名称が使用される場合は、親族名称で呼ばれる者の役割や立場を特に明らかにする必要がある場合であり、その使用は日本語よりもずっと限られている。また、例えそのような使用であっても、視点の移動、つまり相手と自己同一化するということはせずに、視点はあくまでも話者の視点を保ち、個対個の対峙が曖昧に表されるということは起こらない。実際には、“Dad”と子供は父親に呼びかけるが、母親が息子の視点に立ち、自分の夫を“Dad....”と呼ぶことはない。従って、本文中の例のように、老婦人が自分の娘を孫の視点に立って“Mom....”というようなことは到底あり得ないことである。

５）もともと「そなた」「かなた」「あなた」「こなた」は、「こ・そ・あ」に見られるように、話し手を中心に形作られる直示的な用語（deictic terms）であり、指示詞である。一般的に、これらはもともと空間指示であったものが、時間指示にも拡大され、心理的な距離も表すようになったと言われている。平安時代以降、「こなた」は「そなた」「あなた」「かなた」に対し、話し手に近い近称の指示代名詞として用いられていた（『日本語語源大辞典』2005）。

６）14世紀から16世紀での出現。

７）亀山（1976：16）によれば、「フンボルトのある論文を見ますと、「こなた」はある『日本文典』では、

男性と女性とで使い方が違うと記されていると書いてありますが、こうなるとフンボルトには想像を絶する事態になってしまう。誰か自分に日本語のこの秘密を教えてくれる者はいないかと、ほとんど匙を投げた形で嘆息しています。」と記されている。

8）一人称詞が二人称詞に転換する際は、敬意の低い人称代名詞になるのが常である（『国語大辞典　上代編』）。これは ‘semantic deprecation’（意味の悪化）という現象であり（Shibasaki 2005）、もともとは相手に対する敬意を表す語の意味や内包的意味が、その意味を失い敬意の低い意味になる。一人称詞が相手を敬い、自分を下げるという意味で用いられていても、二人称詞になるときにこの「意味の悪化」を起こす場合が多い。

9）Shibasaki（2005）は、人称詞の指示対象が変化していくことを “referential shifting” と呼んでいる。この現象は、日本語ばかりでなく、西洋語（イタリア語、ドイツ語）にも観られるが、それらはいずれも三人称指示から二人称指示への移行であり（Shibasaki 2005：167）、日本語に観られるような一人称指示から二人称指示への移行は観察できないようである（Levinson p.c.）。一人称詞が二人称詞として用いられる現象は、ヴェトナム語、タイ語、中国語などの日本語以外のアジアの言語にも観られる現象である。

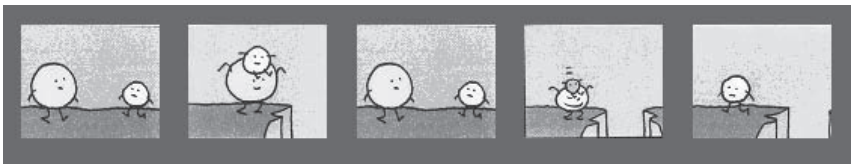
10）13世紀初めか？『宇治拾遺物語』とは、宇治大納言物語の拾遺の意味。２冊からなる説話集。編者未詳。成立は13世紀初めか。天竺・震旦・本朝にわたる説話197話。滑稽的要素も少なくないが、仏教的色彩が濃い。今昔物語などを承け、鎌倉時代説話文学を代表する。

11）「不老不死の仙境に住んでいることができたのに、自分の心からとはいえ愚かであるよ、この人は。」の意。浦島太郎の伝説の最も古いものの一つ。作者は高橋虫麻呂とされるが異説もある。奈良時代初期の歌人・虫麻呂には各地の伝説に材をとった作品が多くあり、伝説の歌人として知られる。自編と推定される「高橋虫麻呂歌集」の名が万葉集の中に見える。

12）この歌は、「ほととぎすよ、お前が行って鳴く里が多いものだから、私はお前を愛してはいるけれど、自然とイヤになってくるよ」と、相手の浮気心をほととぎすにたとえて詠んだもの。

13）Shibasaki（2005）は英語による。因みに、Shibasaki（2005）では、「指示原形」は “Original reference” であり、「拡張指示」は、“Shifted/extended reference” となっている。また、中世から近世において一人称詞から二人称詞への推移のあった再帰代名詞の「うぬ」、及び、現代日本語で三人称詞から二人称詞への推移が見られる「かれ」「かのじょ」についても言及されているが、本稿では取り扱わないため表１では表示していない。

14）Mr O コーパスは、「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」（平成15・16・17年度科学研究費基盤研究Ｂ）のもとに、2004年に日本女子大学で収集された異言語・文化間比較を可能にするコーパスデータである。コーパスは、会話、一人語り、課題達成相互行為の三部構成からなっており、収集した言語は、日本語、アメリカ英語、韓国語、リビア・アラビア語である。本研究では、二人の共同作業で行う課題達成データを使用した。以下に示すのは、課題達成に使用された絵カードの例（一部）である。



15）「場の理論」は、清水（1996）により生命科学の分野から発したものであるが、現在では社会の中の人間のあり方や世界の中での人間の生き方についての一つの哲学的思考として、経済、ビジネス社会にまでも広がりをもち、多くの関心を集め始めている。哲学としては、西田哲学や仏教哲学にも通底する思想をもつ。言語研究においては、特に日本語及び東アジア言語の様々な言語現象を説明しうる理論として関心が寄せられつつある。